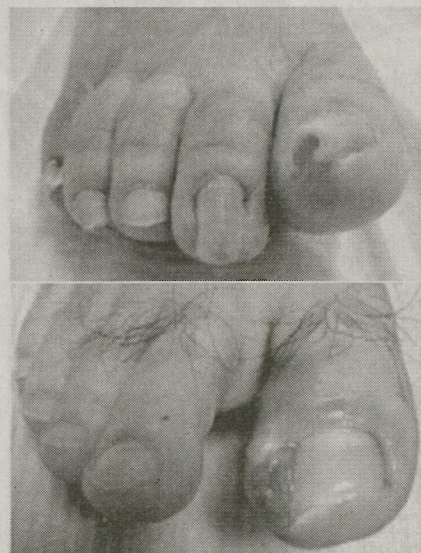


足の病変見逃すな

壊疽で切断年間1万人



「日ごろから足を大切と語
くする竹内一馬医師（高知市
の県立牧野植物園）」



巻き爪＝写真上＝や
化膿したまま放置さ
れた足＝同下。放置
すると、壊疽につな
がることも（竹内医
師提供）

靴店とも連携、地道に啓発を

高知市のNPO法人「介護予防フットケアサポートねっ」と主催のフットケアセミナーがこのほど、同市内で開かれた。那珂川病院(福岡市)血管外科部長の竹内一馬医師が「超高齢化社会に備える足病診療の重要性」と題し講演。医療、介護現場だけでなく、地域の靴店なども連携し、高齢者の足を守る取り組みを紹介した。要旨を紹介する。(門田朋三)

足の病気は万病のもと。基礎がしっかりしていない建物ややがて崩壊するように、足の健康は全身の健康維持の基本だ。足病変を早期に発見して治療していくことは、高齢化社会において豊かで健康な長生きを目指すことにつながる。

私は医療現場でフットケアに取り組んでいる。「フットケア」と聞いて、ネイルアートやマッサージの一種を想像する人もいると思うが、医療でのフットケア診療とは、足に起こった病変の原因を追求して治療し、再発を防ぎ、足病変から全身を診ることで、少しずつ広がっている。

「たかが、けが」

足の病変が進行し、真っ黒に

竹内医師(福岡・那珂川病院血管外科部長)高知市で講演

変色する「壊疽(えそ)」の状態になると、病院を受診しても切断するしかないのが現実だ。糖尿病の高齢男性がある日、足の親指に巻き爪があるのを見つけた。数カ月後、親指が化膿(かのう)してきたが、「たかが足のけがくらいで病院に行くなんて。消毒すれば治る」と放置。半年たっても治らないので「おかしいな」と病院に行く

と、いきなり「命に関わるので、足を切断する」と告げられた。巻き爪から感染症を起こし、壊疽へと進行した典型的な症例だ。

皆さんは「徐々に真っ黒い足になる」と思っているかもしれないが、徐々に進行するケースは非常にまれ。足のけがやたこ、うおのめ、靴擦れがなかなか

か治らないまま感染症を起こすと、数週間程度で急激に壊疽へと進行し、取り返しがつかないことになる。

糖尿病や、閉塞(へいそく)性動脈硬化症など下肢血流障害のある患者、人工透析を受けている患者は下肢の傷や水虫から感染を起こしやすい状態になっている。特に糖尿病で末梢(まっしょう)神経障害があり、痛みを感じにくくなった人ほど、病変の発見が遅れてしまう。このほか、慢性関節リウマチ、膠原病(こうげん)病なども足病変が起こりやすい疾患。足や爪に

変形のある人や、いいかげんな靴の履き方をしている人も要注意だ。国際糖尿病連合が2011年、「世界では20秒に1人の糖

尿病患者の足が失われている」と報告した。日本で下肢切断歴を有する糖尿病患者は推定5万人。足の指の切断も含めると、年間1万人以上の足が切断されているともいわれている。

足の病変は幅広い。私が勤める那珂川病院にはフットケア外来があり、血栓症や下肢静脈瘤(りゅう)などの病気だけでなく、巻き爪、爪の水虫、外反母趾(ぼし)なども診察している。義肢装具士や地域の靴店と連携して靴やインソールも選んでいる。

治療は大事だが、予防も大事。日ごろから足をチェックし、病変に早く気付いて治療しておけば切断を回避できた症例

足病医「養成を

福岡では医療関係者や靴店、義肢装具士らが一緒にになり、足病変の啓発にも取り組んでいる。寝たきりの高齢者を一人でも減らし、糖尿病を含めた生活習慣病の発症や悪化を防ぎ、病気になる切斷肢を減らすことで、医療費の削減にもつながればと考えている。11年にはNPO法人「足もと健康サポートねっ」とを立ち上げ、定期的に啓発イベントを行っている。

イベントの際、来場者に「足のトラブルで困ったときに相談できる医療機関はありますか」と質問すると、7割の人が「いいえ」と答える。爪の治療一つ取っても、皮膚科なのか、外科なのか、患者にはよく分からないのが実態。「医療機関を受診しても、足のことは医師があまり真剣に診てくれない」という声も多い。幅広い足病変にきちんと対処できる「足病医」の養成が必要だと思っ

その上で、足に携わる医療関係者以外の職種と連携し、地域密着で啓発活動を地道に継続していくことが大切。足が痛くて困っているのに相談できる場所がない「足難民」を救う福岡でのNPO活動は、私の中でのチーム医療、地域医療、社会貢献だと思っ

高知でも昨年、「介護予防フットケアサポートねっ」とが設立され、医療、介護現場と連携した高齢者向けのフットケアなどに取り組んでいる。楽しく歩き、健康に長生きできる人を増やすため、フットケアの輪が全国に広がることを願っている。